role-playing Real

猫柳ハヤ

role-playing Real

　蒼が目に痛いくらいの晴れた日。僕等は地図を頼りに冒険に出発した。地図を見つけたのは勿論君で、二人で肩を寄せ合って暗い屋根裏で秘密に笑ったのだ。其程、羊皮紙に五線譜で書かれた地図は、十分に僕等を高揚させた。
　暫く歩くと、広い草原に出る。目印は無い。ただ無数の道が捩れ、絡まり、寸断され、何処かに続いている。僕等は手にした五線譜を広げた。

　ざあーー

　強い風が譜面の音階を吹き飛ばしていく。意味を持って並べてあった音符はすっかりと秩序を失って、カラカラと乾いた音を立てて五線紙から零れ落ち、舞い散った。
「それはほんもののまがいものさ。」
　岩山の上から大きな鳥が嘲笑う。
「煩いよ、roc 。地図を壊す程の風を起こしたのは、おまえじゃないか。」
　怪鳥rocを睨み付け、失った道筋に思う不安を押し殺す。
「ほんものなら、壊れないさ。」
　笑いながら翼を震わせ、僕等の心に冷たい風を吹き入れてきた。
「じゃあ、ほんものは何処に、」
「白波さ。」
　風の音で発音が聞き取れない。
「海、」
「盗まれたさ。」
「海に、」
　一際、強い風が吹く。嘲笑も大きくなって僕等の気持ちを萎えさせようとした。
「盗むのは盗賊さ。」
「白波(はくは)の事か。」
「早くしないと、岩礁(rocks)に打つかってただの泡に成ってしまうさ。」
「行こう。」
　僕は君の手を取って走り出した。冒険に困難は付きものだと、いつも君は云っていたから。
　しかし、辿り着いた海は既に青を消して、白い泡に埋め尽くされてる。
「間に合わなかったね。」
　海を見たまま、君が呟いた。
「そんな……、」
「元々、地図かどうかも判らない五線譜だったのだし、諦めた方が良い。」
　僕を哀れみの籠もった視線で見つめる君を、僕は知らない。

「君は、誰、」
「僕は僕だよ。」
「僕の知っている君ならそんな事は云わない。」
「僕は事実を云ったまでだよ。」
「事実が真実とは限らない。」

「君は、誰、」

　僕は低く問い質した。繋いでいた筈の指が、霧を掴んでいた様に解けていく。
　途端に君の輪郭が揺らいだ。ガチャリと音を立てて錠(lock)が解ける。
「遅いよ、いつまでそんなまがいものと遊んでいるんだい、」
　ほんものの君が笑う。
「そんなに僕の模造品は良く出来ていたのかい、」
「君自身が創ったんだから、良く出来ていない筈がないだろう。」
　不貞腐れて口を尖らす僕の肩に君の細い腕が回る。引き寄せられて耳元を擽る笑みに、心臓が一つ大きな音を立てた。
「先に進もうか、」
　跳ねた肩をするりと撫でて君は腕を外すと、先を促すように頤で道を示す。心臓を落ち着けるように息を吐いて、僕は手にしていた五線だけを残して白紙になった地図を見せる。
「これでは目的地が判らないよ。」
「そんなの、」
　君は得意げに顔を上げて片眼を軽く閉じると、ひらりと五線譜を僕の手から取り上げる。
「歌ったら良いんだろう、」
「え、」
「何が良い、」
「何って、」
「そうさ、なんだって良いんだよ。」
　片手に五線譜、もう一方の手で僕の手を取ると君は駆け出した。道は一本で真っ直ぐ地平線の彼方へと続いている。引っ張られて走り出した僕に、優しい風が君の歌を届けてくれた。
　きみとなら迷わない、と、そう思った。

・・了